

足並み揃えて茶箱を作る

名人

梶川かじかわ

榮市えいち

・静岡県榛原郡川根本町

聞き手

実川じつかわ

諄星しんせい

・千葉県八千代松陰高等学校2年

■茶箱とは一体…？

茶箱というのは、名前の通りでお茶の箱。地場木材の杉を使って一つ一つ手作業で作ってる。茶箱自体は明治時代の後期から使われてて、防湿防虫っていう特徴を生かして外国にお茶を輸出するときに使った。でも今ほら、プラスチックとかダンボールのおかげで需要が少ない世の中になってきたでしょ。だから、お茶を入れる以外にもお米を入れたり、インテリアにしたり、使い道が変わってきた。この前はLOFTさ



取材時にいただいた茶箱の完成品

んでインテリアの商品を出したっけな。

■自己紹介と幼少期

名前は梶川榮市。昭和20年1月28日生まれで年齢は77歳。今は妻と2人で住んでるだけんが、子供が3人、孫が6人、そいで生まれたばかりのひ孫が1人いる。

おれ自身は11人兄弟の7男で末っ子だよ。だけん、おれが生まれる前に3人亡くなってるから、その人たちは知らないな。その時は食糧難とかで大変だったらし



茶箱と梶川さん

くて、親父が背におんぶしながら亡くなった子もいるって聞いたな。11人を育てた親父は本当に尊敬してる。今は兄貴2人が年取って亡くなって6人しか残ってないな。

おらが小さい頃は大変だったと思う。戦時中だからお金は使えんっけよ。正月三賀日でも100円くらいしか貰えない。まあその時代はキャラメル1粒1円なんて時代だったからそのへんのギャップはあるだけんが。

だから、遊ぶもんは自分たちで作ったりしたくないな。いろいろ作るためにいつもナイフは持ち歩いてた。今の衆には考えられないだけんが、鉛筆なんかもそれで削ってた。そういうのもあって小さい頃は活発な子供だったな。とにかく遊ぶことが好きだもんで、山なり川なり木登りなり、いろんなことやってた。

■茶箱職人になるまで

おらは勉強嫌いだもんで、中学卒業したときに静岡市の方に就職した。特に夢みたいなんは持ってなかっただけんが、家は出なきゃならんもんで、昭和35年から静岡市の方の木工機械の製作会社に行ってた。そいでおれ爪の病気にかかっちゃってき。そんなときは下宿してたから、先輩がお風呂入ってからおらがお風呂入ってた。だからきつと先に入った先輩が菌を持って、それがうつったくないな。んで病気自体は大して痛くないだけんが、やっぱり若いときだもんで汚いのが恥ずかしくて、それが理由で3年後にその仕事はやめた。

それから川根本町の方に戻ってきて、兄貴のやってた建具の仕事がちょうど右肩上がりだ忙しくなってきたもんで、手伝ってたら10年経っちゃった。そこで結婚したから、それを機に独立した。

そいでずつとやってきただけんが、今はもう建築の需要がなくなってきたから仕事は薄くなってきた。おれが独立した頃にはこのあた

りにも十数箇所は建具やってるところもあっただけんが、今じゃもうおれ入れて2箇所しかない。おらなんか今はもうやってないようなもんだからもう1軒しか残ってない。やつぱり需要がないだけんな。過疎だから若い衆が出ていってじいさんばあさんだけが残る。そうすると仕事がなくなつて、工務店さんともなくなつてきたし、要するにそうだな、衰退だな。

だから、仕事にもなくなつてきたし、年齢的にもそろそろやめてもいいかなあと思つてたところに茶箱の仕事のお誘いがきた。今働いてるところが前田工房っていうんだけど、その先代の親父が茶箱の仕事をやめちゃつてそれを引き継ぐ人がいなかっただね。おらの今やってる仕事は「木取り」って言うだけんが、それをできる人がいないからおれにやつてくれないかって。それで結局やるからには本腰入れてやるようになって。でも建具やら茶箱にこだわってなつたつてことはないな。

要は建具の仕事がなくなつてきたのと、ちょうどおれが経験者つてことで、偶然がちよつと重なつたところもあるだけんさ。正直なところ、流れでなつたつてところが大きいかな。今の若い人がどう考えてるかは知らないけど、その時分のおれからすると将来が結構漠然としていてさ。おれ自体が勉強嫌いの遊び好きつてだけで、ちゃんと考えてた人もいっぱいいただろうけど、おらはあんまりちゃんと考えてなかつた。

■建具職人の仕事

建具職人つて言つてもいろいろあるだけんが、おれの場合は一般住宅の木製建具の製造販売。一般住宅や工務店からの注文を受けて、製造してはめ込む。建具は自分でデザインしたり、値段決めたりできる自由度の高さが良かったな。もちろんお客さんとのすり合わせもあるだけんが、自分でデザインしたものが完成する瞬間は気持ちがいい。だから時々仕事もらつたときに「ここだけはどうしてもやりたいなあ」っていうのは、頭の端に

あるつけよ。あとは「こういう建具を入れたい」とかね。お金は貰わんでもそういうことはやったりしてきた。まあ現代住宅になつてくるとそういうのもなくなってくるし、障子とかよりもパネルみたいなやつの方が多
いからね。寂しいね。

そいで建具も良いところだけではなくて、注文の期日に間に合わせるために夜中まで仕事したりしなきゃならなかつたりするのは大変だったなあ。

余裕はないつけよ、はつきり言って。大義があるとかじゃなくて、生活に追われるというか。子供もいるし食べていかなきゃいけないから。あとは建具の場合は平割材つつてき、すでに製材されてる建具用材を買うだけ
んがさ。安い材料は無駄が多くて製品も良くないから、これだと高いもの
を買わなきゃならん。

建具以外も受注すれば作るつけよ。タンスやら下駄箱やらの家具を作り
付けることもやったりしたし。実を言うと家具のほうが面白い。建具は平
面だけど家具は立体だからね。工房にある棚なんかもおらがやっただいよ。
まあ作ることは面白いだけんが、茶箱の仕事に就いてから自分で週末はや
ろうとはなかなか思えないな。5日間茶箱の方で働いちゃうととつかかり
がなかなか難しい。とつかかっちゃえばそんなに大変なこともないだけ
んが、まあ今はもうあんまりやらないな。

■茶箱職人の仕事

この広い場所が貯木場になつて、ここにある地場木材を製材していく。
冬は木が水を吸わないから伐採の時期に入るだけえが、伐採は森林組合つ
つうのがやってくれて、それを丸太見ながら買う。

製材からは自分らでやっていく。これはおれじゃなくてもっと若い子の
仕事。ちよつと機械が華奢なもんで、プロの製材機でやったものに比べた

ら大したことないだけんが、地場産品でできるだけ地元貢献するつてい
うのもあるもんで、多少の面倒は仕方ないところはあ
るとは板にして2ヶ月間天日で乾かす。

そんで次は製材したやつをおれが目利きして、20種類ある箱の種類に合
わせて木材を木取っていく。木には節とかあんまりきれいでないところが
あるもんで、それを避けたり利用
しながら選別していく。最後に和

紙を貼つたりするから、完成した
ときに隠れる場所にあんまりきれ
いでないとところを持つてきたり、
逆に見えるところにはきれいなと
ころを持つてきたりする。それを
できるだけ材料の無駄を生まない
ように行つていく。会社と環境に
負担かけないようにね。んで基本
的におれの仕事は木取りだけ。そ
の他にもたまにはやるだ
けんが、製型は他の人
がやる。基本は共同作
業だいな。

木取りのあとは、木
には癖があるもんで、
水をつけて何枚か重ね
て万力で2日くらい抑
える。そうすると真っ
直ぐになつてプレー



製材機



貯木場

ナーっていう仕上げ用の機械に通しやすくなる。癖があるとプレーナーにかかりにくい。

そうしてから仕上げとしてプレーナーという機械で厚みに合わせて削る。これで材料は完成。

そしたら今度は縦切りって言って、茶箱の深さの寸法に合わせて切っていく。んで、箱の大きさによっては1枚じゃ足りないもんで、そのときは波釘で2枚をくつつけていく。今度は深さはできてるもんで、横幅を作っ



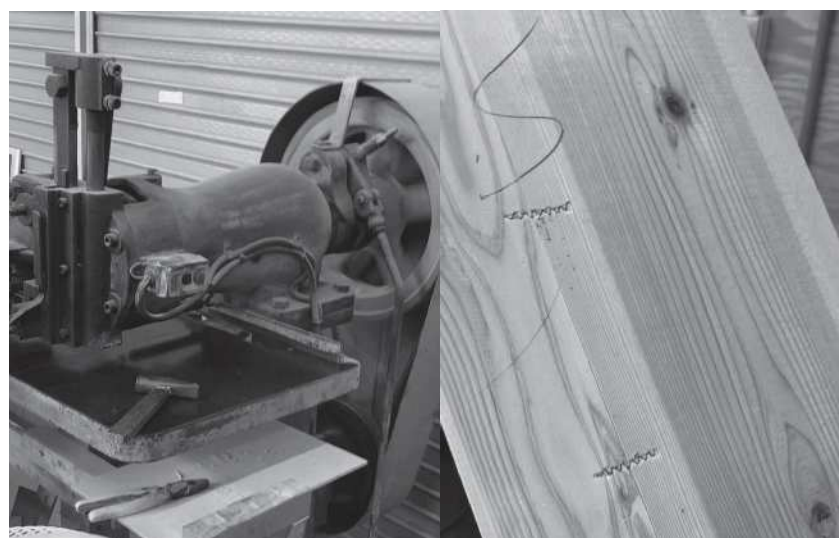
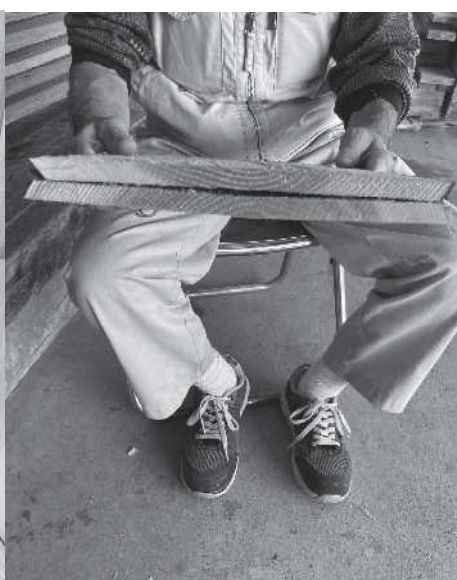
木取りをする梶川さん



天日干しの木材



木の癖と万力



波釘打機



プレーナー



はんだ付けとその完成形



タッカー



完成品

ていく。それで蓋を別に作っていく。
木と木のつなぎ合わせはボンドとかではなくてタッカーという機械でやる。

ここまで終わったらトタンを貼る。ここが茶箱の質の重要なところだいな。茶箱と木箱の違いはトタンにある。トタンを入れることで防虫防湿が可能になる。それでこれは鉛では体に悪いからスズを使ってる。環境と体に優しいものを作ってるだいな。それをハンダで付ける。それで最後に木と木のつなぎ目が見えないようにすると、強度を上げるために和紙を貼る。そこまでやったら完成。

■茶箱仕事の魅力と大変なところ

茶箱の仕事は、とにかく地産材料を無駄なく使えるつけよ。そこが良いな。ただあまり手をかけすぎると今度は採算的に合わなくなってくるだけえが。要はちっちゃい細かいものまで使っても、採算が合わんと給料ばっかもらうような形でよくないしね。今は好きにやらせてもらってるだけんが、できるだけそういう負担を会社にさせないようにやってる。

実のところ、どっちかといえば建具のほうが仕事としては面白いところがある。建具はやっぱり自分でデザインできるから楽しいな。でももうこの歳だけん、決まったことをやる方が楽だね。見積もりとかもしなくていいし、設計図も書かなくていい。おれからすりゃあ、元気に仕事ができる。せめてもらえるからありがたい。

あとは廃材とかでの廃棄がまったくないのも環境に良くて良いね。粉とかカンナのクズとかは鶏屋さんが持ってくってくれる。今はいっぱいあるけど、冬になるとこの辺の廃材みんな持っていっちゃう。要するに薪ストーブとかさ。

だから無駄はなんにもない。今日もかつお節屋さんで焚付のために木の破片を取りに来てただね。

大変なところは、意思疎通だな。おらがやるのは木取りだけだから、結局のところ茶箱づくりってのは共同作業になってくる。若い衆が思い浮かべてる板の合わせ方みたいなのがおらのそれと噛み合っていないときがあるからよ。どこをどう使いたいと思っても、他の人たちがそう使おうとしてない場合があるっけよ。「あれ、こんなところに節があるぞ」ってな。その辺のズレがまだ難しいところだけかな。



廃材

■木取りの継承

木の目利きとかなんとかつちゅうのは経験によって生まれてくるものだもんで、だんだんやって経験していく中で培っていく。やっぱ慣れていくしかない。

今の状態なら5人いれば十分だけど、人は足りてる。これより増えようと逆に仕事が回らない。木取りはおれにしかできないから、おれだけどんどん忙しくなっちゃう。だから目利きができる人を増やしたい。

来年からは木取りを覚えてもらって、だんだんおれはやめていく感じしていきたい。この会社もまだまだ綱渡りのところがあるだけだな。トタンは今島田の職人さんに切ってもらってるだけだが、その人もはしはしやらん

くなっちゃったもんで、やっぱそのへんもここで直接やるような形にもつていけないといけんね。できれば自分のところでやったほうが計画的にできるし。

木取りのほうも、おれ自身は動くことが嫌いじゃないもんでさ、できればずっとやっていきたいけど、おれに何かあったときにどうにもならなくなっちゃうから。

木取りのためには、まず種類ごとの寸法を覚えてもらわにゃいかん。うちの茶箱は20種類もあるもんで、それぞれの箱の板の幅とかの使い方もそれによって違ってくるから。昔で言えばこの種類に使う板のパーツは何寸何尺とか、それを頭の中に入れて切ってくだけがさ。でもそれだけ覚えても、節とかきれいな部分じゃ避けながら木取っていかなきゃならんから。中途半端に節があつて5キロの箱だともつたいたないとかあるじゃん。色々な寸法のやつが出てくるから、それを「これは5キロの箱に、これは10キロの箱に」って振り分けなきゃならん。大きすぎないように、小さすぎないようにね。

んで、材料を無駄にしないようにっていうのはもちろんで、色合いにも気をつけている。できるだけ紅色のきれいなやつを見えるところに持ってきて、黒っぽいのか節は見えないところに回す。パズルみたいなところもあるだけだな。

■長いこと生きてきて大事だと思ったこと

やっぱりまずは健康、これは間違いない。若い人にも言えることだけど、健康でなきゃなんもできんからな。逆に健康でいればどういかなる。今もそれを一番大事にしている。深酒はやらないとか、8時すぎには何も食べないとか、そういうのは結構気をつけてる。

それとあとは協調性。要は人間関係の話で、茶箱の仕事のほうも全員が

同じ気持ちにならんとスムーズにいかん。おれひとりになにか思っても周りがそう思っただけやね。そのへんがまだまだコミュニケーションが取れてないんよ、はつきり言っただけ。おれもあんまりあーだこーだ言いたくないもんで、これがこうだと口を挟むか迷うときもある。

こういう田舎じゃ余計そうだけど、郷に入っては郷に従えみたいなところあるでしょ。昔は、同じ町の中でも移り住んだところで、「お前はよそ者だ」って言うてくる人もいたよ。今の時分じゃ考えられないっけな。まあみんながみんなそうだったわけではないっけよ。かばってくれる人もいたから。でもそう言った批判のようなものも、誠意を尽くしてやっていけばなくなっていくのよ。最初は悪く言ってきた人も「榮ちゃん」って呼んでくれるようになった。だからあくまでも相手を大切にしなきゃならんっていうのは確かだな。

■こだわり

でもなあ、別に波乱万丈な人生だったわけでもないからなあ、あんまり取材のネタにはならないかもしれないな。こだわりとかも特にないっけよ。まあ上がり下がりがある人生も面白いだけだが、普通が一番なのかもしれないな。

ただ、人間関係だけは大事にしてるだいな。さっき「流れでここまで来た」って言っただけだが、やっぱりそれは周りの人に恵まれたってことが大きい。やっぱり人



前田工房の皆様と

間関係を大事にしたからなんじゃないかなあと思ってる。一つ一つ誠意を尽くして人と関わっていれば、自ずとみんな優しくしてくれるからね。そういう人たちの気持ちが人生をいい方向に導いてくれる。

〔取材日…2022年9月8日、11月4日〕

【聞き書きを終えての感想】



「あれ、名人って意外と普通の人だな」。これが取材のときに私が感じた率直な感想です。自然と密接に関わるような名人なので、てっきりものすごいこだわりや波乱万丈の人生談があるのかと思って取材の前はドキドキしていたのですが、気さくで話やすく、考えも現代風だったのであまり緊張せずに取材を行うことができました。

私事ですが、近頃は部活の大会や受験が少しずつ近づいてきて、激化していく競争の荒波に揉まれています。そんななかで梶川さんの「一つ一つ誠意を尽くして人と関わっていれば、自ずとみんな優しくしてくれるからね」という言葉にはハッとさせられました。もちろん、勝負の世界に身を置く限りは、競争相手は敵だという意識も大切になります。しかし敵対するなかでも、競争相手一人一人に対する敬意を忘れないようにすれば、周りの人も自分を応援してくれるようになり、自然と結果はついてくるのかもしれないと感じました。

これからも生きていくなかで様々な苦難に直面すると思いますが、今回の教訓を胸に刻んで精進していこうと思います。



profile

梶川 榮市

かじかわえいいち

昭和 20 年 1 月 28 日・78 歳

職業：茶箱職人

【略歴】 静岡県川根本町で生まれて育ち、中学卒業直後に 3 年間静岡市で木工機械の製作会社に勤めていた以外は、ずっと川根本町に住んでいる。茶箱職人になる前には建具職人を生業としていた、木に 60 年近くも携わる木のスペシャリスト。気さくで話やすく、謙虚な性格。人間関係を大切にしており、地域活動への積極的な参加や、環境への深い配慮など、地域への貢献度も非常に高い。